小規模セッションにおけるリーダーの性格特性が集団意思決定に及ぼす影響

○山下和希, 二見斉, 明智裕之, 鴻巣努 (千葉工業大学 社会システム科学部)

A Study on the Influence of Personality Trait to Decision Making in Small Group Sessions

Kazuki YAMASHITA, Hitoshi FUTAMI, Hiroyuki AKECHI and Tsutomu KONOSU

(Faculty of Social Systems Science, Chiba Institute of Technology)

1. 研究背景

高塚ら(2009)は現在の成功率3割のITプロジェクトの難しさとITプロジェクトにおいて成功率上げる要因として集団意思決定の大切さを述べている, それでは対応策の策定にあたって意見調整のプロセスの成否が重要であることを指摘している. 森本(2012)は会議の進行を助ける手段の一つとして, CF (コミュニケーションファシリテータ)を置くことで問題が解決され, プロジェクトメンバの満足度が上昇することを明らかにした. この例のようにプロジェクトにおけるファシリテータの重要性が注目されているが, 場面に応じたファシリテーションスタイルの方法, ファシリテータの育成方法に関する研究例は少ない.

そこで本研究では, ファシリテータの性格特性と集団意思決定におけるメンバの発話をプロトコル分析することによって, ファシリテータの性格特性の違いが会議にどのような影響を与えるのかを明らかにする. これにより, ファシリテータの育成や性格特性に適したファシリテーションツールの選択に貢献することが出来ると考える.

2. 研究目的

本研究の目的は, 次の3点である.

- (1) 集団意思決定におけるリーダーの発話が性格特性によって異なるかを調査する.
- (2) リーダーの性格特性により, メンバの発話に違いがあるかを調査する.
- (3) 発話の背景となる思考領域を定義し, リーダーおよびメンバの発話にどのような特徴があるかを調査する.
- (4) リーダーの性格特性が意思決定に与える影響を探り, 性格特性別にファシリテーション時に留意すべき点について考察する.

3. 研究方法

本研究では千葉工業大学社会システム科学部の

コミュニケーションマネジメントを受講している学生168名を実験協力者とした. 手続きは次のとおりである.

- (1) 解が一意に決まらず, 多様な結論があり得る合意形成課題を用意する.
- (2) 実験協力者にユニアグラム性格診断を実施し, 同質型および補完型のグループを編成する.
- (3) 課題実施時の発話を動画にて撮影し, 発話カテゴリと回数を計測する.
- (4) 発話カテゴリの分析にあたっては, 思考領域別の発言ワードをもとに計測する.
- (5) リーダーの性格特性別にリーダー自身およびメンバの発話の特徴を分析する.

4. 研究結果

リーダーの性格特性を説明変数, 発話スコアを従属変数として多重比較を行った. 表1はタイプ1 (改革者タイプのリーダー) のときの物理領域に関する発話数である.

物理的領域についてタイプ1はタイプ2,6,4,9より有意に発話数が多かった. このことからタイプ1は積極的に発話しながら, 会議を進めていたことが分かる.

表1 物理的領域の発話(タイプ1)

従属変数 (タイプ1との比較)	平均値の差 (I-J)	有意確率
タイプ2	10.27	.000***
タイプ4	2.89	.871
タイプ5	3.39	.529
タイプ6	4.55	.037**
タイプ7	5.98	.008***
タイプ8	-1.36	.994
タイプ9	5.71	.010**

表2はゼロ発話者数の多重比較である. これはメンバのうちセッション中に一度も発話をしなかったメンバ数を比較したものである. 表2より,

タイプ1がリーダーの時は発言を一切しないメンバーが有意に増える傾向が明らかになった。

表2 ゼロ発話者数の比較

リーダータイプ名 (タイプ1との比較)	平均差 (I-J)	有意確率
タイプ2	-.875	.001***
タイプ4	-.750	.047**
タイプ5	-1.000	.000***
タイプ6	-.500	.046**
タイプ7	-1.000	.000***
タイプ8	-1.000	.000***
タイプ9	-.733	.002***

表3は、タイプ2を説明変数とした物理的領域に関する多重比較である。タイプ2(献身者)は、自身の意見領域の発言についてタイプ1, 4, 5, 7, 8との比較において有意差があった。これは、献身者の性格であり追従的であるタイプ2の発言自体が少なかったことによると考えられる。このタイプでは、自身が積極的に課題に関わる姿勢を養うことが必要であると考えられる。

表3 物理的領域の発話(タイプ2)

従属変数 タイプ2との比較	平均値の差 (I-J)	有意確率
タイプ1	-10.27	.000***
タイプ4	-7.38	.014**
タイプ5	-6.88	.003***
タイプ6	-5.72	.001***
タイプ7	-4.29	.114
タイプ8	-11.63	.000***
タイプ9	-4.55	.060*

同様の分析により、タイプ5(研究者)のリーダーは物理領域、機能領域、文化領域の3つからなる意見領域総数の発話がタイプ2のリーダーに比べ有意に高かった($p<0.01$)。ここから研究者型のリーダーは献身家のリーダーに比べ、自身が課題自身について考え、発話する傾向があると考えられる。また他者への影響が少ないと考えられた。よってタイプ5のリーダーは自身の思考だけに偏らず、他者への発話を増やす必要があると考えられる。

タイプ6(堅実家)では、ゼロ発話者においてタイプ5, 7, 8のリーダーに比べ有意に低い($p<0.05$)傾向が明らかになった。ここから、堅実家のリーダーは研究者、楽家、挑戦者のリーダーに比べてメンバーへの配慮が欠ける傾向にあると考えられる。タイプ7(楽家)では、思考に時間を要する機

能領域に関する発話がタイプ1, 5, 6, 8, 9のリーダーに比べ有意に低い($p<0.05$)傾向が明らかになった。上記5つのタイプのリーダーより機能思考を避ける傾向にあり、楽観的思考を持っていると考えられる。課題によっては、本質的問題を避けることにつながるため、チームとしての明確にし、実行することが必要だと考えられる。

タイプ8(挑戦者)では、チーム全体の文化領域の発話がタイプ9のリーダーに比べ有意に低い($p<0.01$)傾向が明らかになった。挑戦者のリーダーは、調停者のリーダーに比べチーム全体の発話が上昇していないと考えられる。よってタイプ8のリーダーは全体の発話を上昇させるためにメンバーへの配慮が必要だと考えられる。

タイプ9(調停者)では、自身の意見領域総数がタイプ8のリーダーに比べ有意に低い($p<0.01$)傾向が明らかになった。ここから調停者のリーダーは挑戦者のリーダーに比べ自分自身の意見を出すことがあまりないと考えられる。よって、タイプ9のリーダーは集団意思決定に先立ち自身の思考領域の活性化が必要であると考えられる。

5. 結論

本研究により、リーダーの性格特性により集団意思決定時の発話傾向に違いがあることが明らかになった。また性格特性別の傾向を分析することにより、集団意思決定において留意すべき点をリーダーの性格特性という観点から考察した。これは、リーダーやファシリテータのコーチング場面に貢献するものとする。性格特性別に自信が陥りやすい傾向を自覚することにより、ファシリテータとして中立で効率的な行動がとれるようになると考える。

今後の展望として、リーダーが陥りやすいリスクを補うためのファシリテーションツールやグラフィックの特定などを検討することが可能になると考えられる。

参考文献

- 1) 森本千佳子：プロジェクト成功のためのコミュニケーションファシリテータ活用，プロジェクトマネジメント学会誌，Vol.4，No.4，pp.23-28，2012.
- 2) 高塚有希子，高野研一：ITプロジェクトにおける意思決定プロセス，経営行動科学，Vol.22，No.3，pp.233-234，2009.